

—研究報告—

母性看護学実習に対する女子学生の実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習後の思い—テキストマイニングによる分析—

贄 育子¹⁾・三宅 絢花²⁾

抄 録

【目的】母性看護学実習に対する女子学生の実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習後の思いを明らかにする。

【方法】母性看護学実習を終了した女子学生14名を対象とし、半構造化面接により作成した逐語録を、テキストマイニングで分析した。

【結果】実習前のイメージでは、「対象者－健康」「気持ち－難しい、不安」、実習中感じたことでは、「コミュニケーション－難しい」「ケア－少ない」、実習後の思いでは、「学び－大きい」「2週間－短い」「情報収集－難しい」「母親－難しい」が抽出された。

【結論】母性看護学実習に対して女子学生は、実習前は、他領域とは異なる健康な対象者に対する難しさや不安をもっている。実習中は、ケアの少なさからコミュニケーションのきっかけがつかめないことに難しさを感じている。そして実習後は、情報収集や母親とのかわりの難しさを感じている。しかし、実習前の不安は、実習後には学習意欲へと変化している。

キーワード：母性看護学実習、女子学生、イメージ、思い、テキストマイニング

I. 緒言

臨地実習は、既習の知識や技術を活かして対象者に看護展開を行い、看護実践能力を身につけることを目的とした、机上の学習と実際を統合する重要な学びの機会である。母性看護学実習では、受け持ちケースの看護過程を展開し、妊娠・分娩・産褥各期の女性と新生児の生理的变化を基に、ウェルネスの視点でマタニティサイクルにある対象の健康課題をとらえ、健康の保持増進と正常からの逸脱予防のための看護を学修する。

そのため、他領域での知識や技術とは異なる母性看護特有の知識と技術が必要になる。さらに、母子を同時に受け持ち看護展開することや、母子ともに日々の変化が著しいこと、入院期間が短いこと等により、展開の早さも必要となる。また、母性看護学実習では、対象者の特性から男子学生が単独で実習を行うことは難しく、男子学生は女子学生とペアで実習を行うことになる。

このような特異性をもつ母性看護学実習に対して学生は、実習前は「実習は難しく緊張を伴う、不安な学びの場である」と感じている¹⁾。また、「分娩見学又は生命誕生に対する期待」「母性看護学実習に対する期待」「母

性看護学実習に対しての意欲または実践したいこと」といったポジティブな気持ちと、「母性看護及び技術に対する不安」「実習態度・方法に対する不安」「実習に対しての漠然とした不安」といったネガティブな気持ちの両方をもっており、女子学生はポジティブな気持ちが優勢になり、男子学生はネガティブな気持ちが優勢になると報告されている²⁾。

そこで本研究では、母性看護学実習を終了した女子学生に、実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習中の疑問、実習後の思いについてインタビューし、母性看護学実習に対する女子学生の思い（気持ち）を明らかにする。前述のように女子学生と男子学生とでは実習前の気持ちに相違があるとされているため、今回は女子学生を調査対象とした、そして、実習前にネガティブな気持ちが強い男子学生とペアで実習に臨むことが、女子学生の実習に何らかの影響を及ぼしている可能性も考えられるため、男子学生に対する思いについても調査した。その結果から、今後の母性看護学実習における学習支援の示唆を得る。

本研究では作成した逐語録をText Mining Studio 4.2を用いて分析した。テキストマイニングは、定型化されていない文章の集まりを自然言語解析の手法を使って単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を

1) Ikuko Nie 広島都市学園大学健康科学部看護学科

2) Ayaka Miyake

分析して有用な情報を抽出する手法やシステムである。抽象的な、直感的な経験を操作可能な尺度や基準など、測定可能な測度に変更するため、分析者の恣意によって偏らない結果を抽出し、分析の方向を決めることができる。また、日本語の特徴を考慮した本ソフトは、看護教育分野では、基礎看護実習カンファレンスの評価³⁾や、基礎看護技術習得に対する学生の認識⁴⁾、精神科保護室に対する受け止め⁵⁾等に用いられており、認知言語学の知見と融合することでメタファーの解明も企図している⁶⁾ため、母性看護学実習に対するイメージや感じたこと、思いを客観的に分析できると考えた。

II. 研究方法

1. 調査期間

平成25年5月～平成25年6月。

2. データ収集方法

1) 調査対象

平成24年9月から平成25年3月に母性看護学実習を終了したA大学女子学生の調査協力を得られた14名。総合病院6人グループで実習した学生11名、クリニック2人グループ2名、クリニック3人グループ1名。総合病院で実習した11名のうち5名の学生は男子学生とペアで実習した。

2) 調査方法

落ち着いて話せる部屋で母性看護学実習に対する実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習中の疑問、実習後の思い、母性看護学実習を行う男子学生に対する思いについて30～40分程度の半構造化面接を行い、内容は承諾を得て録音した。

3. 分析方法

作成した逐語録をText Mining Studio 4.2を用いて分析した。テキストマイニングは、形態素解析という、単語の活用を考慮しつつ最小の意味単位に分割する段階(分かち書き)と、形態素から大きなクロス表に書かれた数字を処理する段階(解析)の2段階のメカニズムからなっている。解析については、以下の分析を行った。

〈頻度分析〉

使われている単語を探索するため、頻度分析の中の名詞・動詞・形容詞の上位10件の出現回数をカウントする単語頻度解析を行った。これによって、全体の単語頻度と、実習前、実習中、実習後の単語頻度を比較して検討することができる。

〈特徴分析〉

単語頻度解析では、出現頻度が多くなると上位に現れて

いない重要な単語を見落とす可能性もあるため、補完類似度を用いて特徴分析を行った。言語の出現頻度に大きな違いがある場合、すなわち、特定の単語の出現頻度と全ての単語の出現頻度との差が大きい場合、 χ^2 検定よりも補完類似度が有効となる⁷⁾。補完類似度を指標値とした特徴語抽出と特徴表現抽出により、実習前、実習中、実習後に特徴的に出現する単語および係り受け表現を検討した。

〈注目分析〉

最低信頼度60%、共起出現回数2回以上のものを抽出する注目分析を行い、出現頻度の高い単語に注目し、その単語の表現や共起を検討した。

〈評判分析〉

良いイメージで語られることば・悪いイメージで語られることばを抽出する評判分析を行った。これは、単語に対して、好意的・非好意的表現それぞれで語られた回数をカウントし、それをもとに好評語・不評語のランキングを作成するものである。これにより、学生のポジティブな感情やネガティブな感情とその要因を検討した。

〈話題分析〉

話題分析の中でことばを介した属性の分布をみる対応バブル分析を行った。対応バブル分析は、2種類のカテゴリ変数の頻度行列(クロス表)から、各カテゴリにスコアを与えることにより、カテゴリ変数を数量へと変換する。カテゴリから変換されたスコアを用いてデータを2次元上に配置すると、関連のあるカテゴリは近い点に配置される。この結果から、属性(実習前、実習中、実習後)と単語の関連性と、各属性間の距離から意見の近い属性と意見が異なる属性を検討した。

4. 倫理的配慮

研究の目的や意義、匿名であること、データの守秘管理、回答により不利益を被らないこと、途中辞退も可能であることを口頭及び書面にて説明し、同意を得て面接を実施した。そして、面接は、室外から面接風景が見えず、施錠できる場所で行った。

また、本研究はA大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 第1304号)。

5. A大学における母性看護学実習

1) 母性看護学実習の目的・目標

目的：女性の特性とヘルスケアニーズを理解し、リプロダクティブ・ヘルスの視点から必要な援助ができる基礎的能力を養う。また、特にマタニティサイクルにある対象および家族へ、適切な援助ができるための基本的

な実践能力を養う。

- 目標：①妊産褥婦および新生児の特徴を理解し、根拠に基づいた看護が実践できる。
 ②対象の多様な価値観を意識し、意思決定を尊重した看護が実践できる。
 ③妊産褥婦および新生児の看護を通じて、チームの一員として看護の立場から行動できる。
 ④対象の看護を通じて家族や親子の絆に触れ、自己の母性・父性観を発展させる。
 ⑤人間的成長や看護実践を発展させるために、自己の看護を振り返り考察できる。

2) 実習方法

2～6名の学生を1グループとして、女子学生は2週間の病棟実習を行った。

3) 指導体制

グループごとに1名の教員が担当し、実習指導を行った。

Ⅲ. 結果

1. 頻度分析

単語頻度解析の結果、実習前のイメージでは「イメージ」、「新生児」、「良い」、「かかわる」、「出産」、「難しい」、「不安」等が抽出された。実習中感じたことでは「新生児」、「感じる」、「病棟」、「違う」、「看護師」、「助産師」、「雰囲気」、「母親」等が抽出された。実習中の疑問については「疑問」、「指導者」、「調べる」等が抽出された。実習後の思いでは「母親」、「出産」、「新生児」、「イメージ」、「看護師」、「実習」、「助産師」、「難しい」等が抽出された（図1）。

男子学生に対する思いについては、実習前は「男子学生」、「母親」、「自分」、「良い」、「受け入れ」、「抵抗」、「難しい」、「イヤ」等が抽出された。実習中は「男子学生」、「難しい」、「乳房ケア」、「母親」、「良い」、「外陰部」、「観察」、「男性」、「父親」等が抽出された。実習後は「男子学生」、「難しい」、「外陰部観察」、「学ぶ+できる」、「母親」、「良い」等が抽出された（図2）。

2. 特徴分析

補完類似度を用いた特徴語抽出では、すべてにおいて

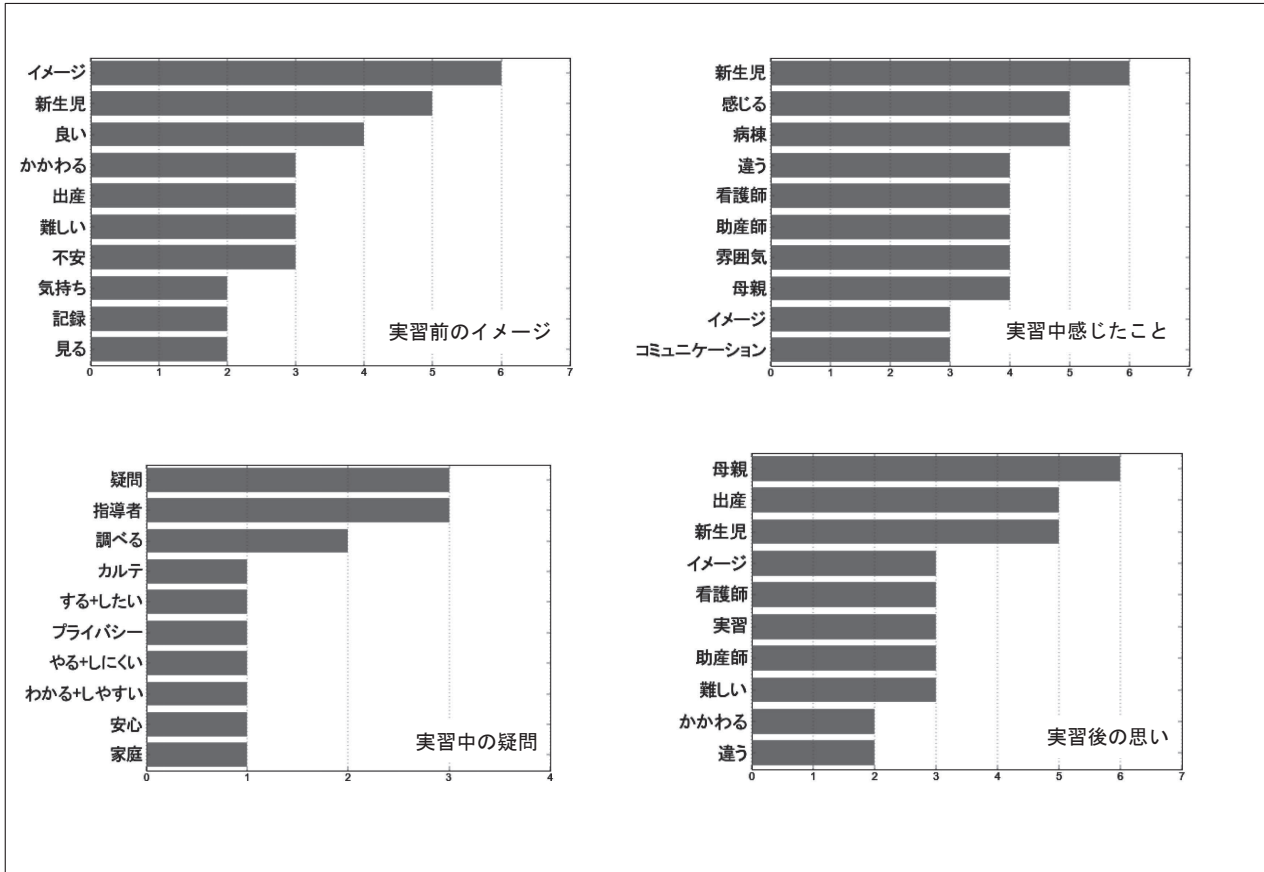


図1 単語頻度解析 母性看護学実習に対する思い

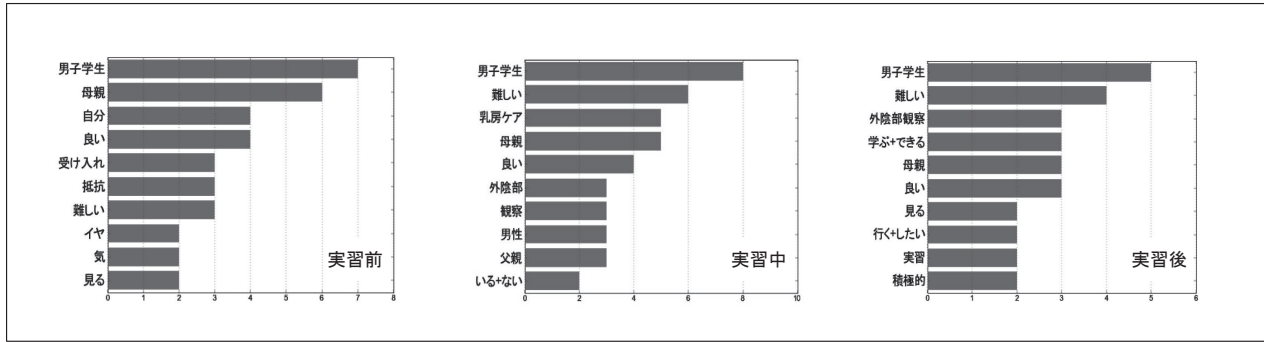


図 2 単語頻度解析 男子学生に対する思い

単語頻度解析の結果と同様の単語が抽出された。特徴表現抽出の結果、実習前のイメージでは「新生児-生まれる」、「生命-誕生」、「楽しみ-大きい」、実習中感じたことでは「コミュニケーション-難しい」、「イメージ-変わる」、「ケア-少ない」、実習中の疑問では「カルテ-見る」、「疑問-考える、答える」、「教員-相談」、実習後の思いでは「生命-誕生」、「2週間-短い」、「学び-大きい」が抽出された(表1)。

表 1 特徴分析 特徴表現抽出

実習前	実習中	実習後
新生児-生まれる	コミュニケーション-難しい	生命-誕生
生命-誕生	イメージ-変わる	2週間-短い
楽しみ-大きい	ケア-少ない	学び-大きい

男子学生に対する思いについては、実習前は「気-遣う」、「異性-難しい」、実習中は「男子学生-いない」、「イメージ-変わる」、実習後は「男子学生-見る」、「看護-学ぶ+できる」が抽出された(表2)

表 2 特徴分析 特徴表現抽出 男子学生に対する思い

実習前	実習中	実習後
気-遣う	男子学生-いない	男子学生-見る
異性-難しい	イメージ-変わる	看護-学ぶ+できる

3. 注目分析

注目語表現として、実習前のイメージでは「良い-イメージ」、実習中感じたことでは「病棟-雰囲気」が抽出された。男子学生に対する思いについては、実習中は「男子学生-いない」、実習後は「男子学生-見る」が抽出された。

4. 評判分析

実習前のイメージでは、好評語として「イメージ-良い」、「対象者-健康」、不評語として「気持ち-難しい、不安」が抽出された。実習中感じたことでは、好評語と

して「イメージ-良い」、「雰囲気-良い、和やか」、不評語として「コミュニケーション-難しい」、「ケア-少ない、難しい」が抽出された。実習後の思いでは、好評語として「イメージ-良い」、「学び-大きい」、「母親-優しい、健康」、不評語として「情報収集-難しい」、「母親-難しい」が抽出された(表3)。

表 3 評判分析 評判抽出

	実習前	実習中	実習後
好評語	イメージ-良い 対象者-健康	イメージ-良い 雰囲気-良い、和やか	イメージ-良い 学び-大きい 母親-優しい、健康
不評後	気持ち-難しい、不安	コミュニケーション-難しい ケア-少ない、難しい	情報収集-難しい 母親-難しい

男子学生に対する思いについては、実習前は好評語として「男性目線-必要」、「男子学生-必要(知識)」、不評語として「異性-難しい」、「受け入れ-難しい」、実習中は好評語として、「学生-優しい」、「経験-良い」、不評語として「男子-難しい」、「タイミング-難しい」、実習後は好評語として「イメージ-良い」、「経験-良い」、「母親-強い」、不評語として「イメージ-悪い」、「受け入れ-良い+ない」が抽出された(表4)。

表 4 評判分析 評判抽出 男子学生に対する思い

	実習前	実習中	実習後
好評語	男性目線-必要 男子学生-必要(知識)	学生-優しい 経験-良い	経験-良い 母親-強い
不評後	異性-難しい 受け入れ-難しい	男子-難しい タイミング-難しい	イメージ-悪い 受け入れ-良い+ない

5. 話題分析

対応バブル分析において、実習前は近い距離にあった「不安」が、実習中、実習後は離れ、「母親」に近づいた(図3)。

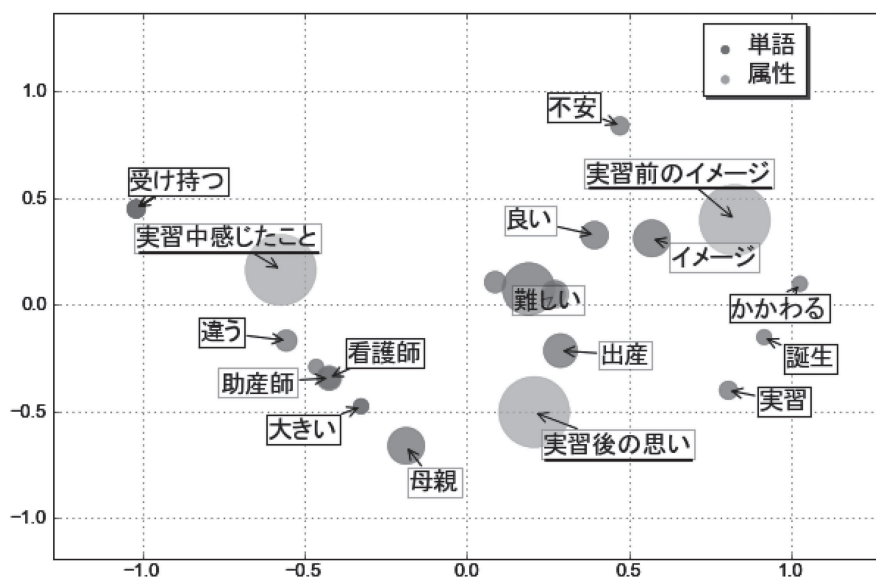


図3 対応バブル分析

IV. 考察

1. 実習前のイメージ

「新生児」、「出産」、「イメージ」、「良い」、「難しい」、「不安」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「新生児-生まれる」、「生命-誕生」、「楽しみ-大きい」という特徴表現、「良い-イメージ」という注目語情報、「イメージ-良い」、「対象者-健康」という好評語や「気持ち-難しい、不安」という不評語、対応バブル分析において、「不安」が近い距離にあることから、母性看護学実習に対して、女子学生は、生命誕生の場である出産や新生児にかかわることに良いイメージをもち、実習を楽しみにしていると考えられる。一方で、他の領域でかかわった健康課題を持つ対象者とは異なる健康な対象者であることから難しさや不安も感じているといえる。

2. 実習中感じたこと

「新生児」、「感じる」、「病棟」、「違う」、「看護師」、「助産師」、「雰囲気」、「母親」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「コミュニケーション-難しい」、「イメージ-変わる」、「ケア-少ない」という特徴表現、「病棟-雰囲気」という注目語情報、「イメージ-良い」、「雰囲気-良い、和やか」という好評語や「コミュニケーション-難しい」、「ケア-少ない、難しい」という不評語、対応バブル分析において「不安」との距離が離れたことから、実習前の不安は軽減したと考えられる。母親や新生児と接し、学生が実施可能なケアが少ないためかかわるきっかけがつかめず、コミュニケーションに困難感をもっていると考えられる。看護師

や助産師の多忙な業務を目の当たりにして、実習前のイメージとは違うと感じているものの、他領域とは異なる和やかな病棟の雰囲気から良いイメージは継続しているといえる。妊産褥婦は、疾病をもつ人と比べて健康レベルが高く、セルフケア能力が高いため、看護者が直接手を出して援助を行う看護行為よりも、確認や看守りケアの方が多くなる⁸⁾。同時に健康教育も多くなり、学生にとっての学びは、実際に見たことのない場面を見学することが中心になる⁹⁾。看護学を学ぶ途上にある学生にとっては、他領域とは異なる対象者、すなわち学生と同年代で健康レベルが高い対象者に対するかかわりが困難感を増強させているものと考えられる。

3. 実習中の疑問

「疑問」、「指導者」、「調べる」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「カルテ-見る」、「疑問-考える、答える」、「教員-相談」という特徴表現から、実習中の疑問については、教員に相談したり指導者に質問したり、カルテを見て考えることや自分自身で調べることにより解決していることがわかった。母性看護学実習において学生は、実習指導者を熟練看護師モデルとし、教員を高い専門性を持つ看護モデルとしてとらえ、影響を受けていることが報告されており¹⁰⁾、実習での学習効果を高める上で指導者や教員のかかわりがキーポイントとなる。

4. 実習後の思い

「母親」、「出産」、「新生児」、「イメージ」、「看護師」、「助産師」、「実習」、「難しい」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「生命-誕生」、

「2週間-短い」、「学び-大きい」という特徴表現、「イメージ-良い」、「学び-大きい」、「母親-優しい、健康」という好評語や「情報収集-難しい」、「母親-難しい」という不評語、対応バブル分析において「不安」との距離が離れていることから、実習後は、生命の誕生という尊い場面に立ち会い、母性看護における看護師や助産師の役割を実感し、看護学生として大きな学びを得ているといえる。それと同時に、母親の児に対する優しさや学生に対する優しさに触れ、母親の偉大さを感じていると考えられる。その一方で、情報収集の難しさや母親のかかわりの難しさも感じていることがうかがえた。母性看護学実習後の意識調査では、66.6%の学生が非常に難しい、やや難しいと回答している¹¹⁾。

しかし、母性看護学実習に対する良いイメージは継続し、実習期間が2週間では短いと感じていることから、実習前の不安は、実習による経験を通して、学習意欲へと変化しているものと推察される。母性看護学実習に対する不安については、実習前に比べて実習後は、ある特定の場面で感じられる状態不安が低下する¹²⁾と報告されている。

5. 男子学生に対する思い

男子学生が母性看護学実習を行うことについては、実習前は「男子学生」、「良い」、「母親」、「受け入れ」、「難しい」、「抵抗」、「自分」、「イヤ」、という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「気-遣う」、「異性-難しい」という特徴表現、「男性目線-必要」、「男子学生-必要(知識)」という好評語や「異性-難しい」、「受け入れ-難しい」という不評語から、実習に行くことは学習のために必要だと考えつつも、母親の受け入れが難しいのではないかと危惧感をもっている。それと同時に、学生自身が母親だったら抵抗があると、対象者の立場になって男子学生の実習受け入れを考えているといえる。一方、男子学生は男性目線での看護を考えることができると、その視点の必要性を感じているといえる。

実習中は「男子学生」、「母親」、「乳房ケア」、「外陰部」、「観察」、「難しい」、「男性」、「父親」、「良い」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「男子学生-いない」、「イメージ-変わる」という特徴表現、「男子学生-いない」という注目語情報、「学生-優しい」、「経験-良い」という好評語や「男子-難しい」、「タイミング-難しい」という不評語から、母親の乳房ケアや外陰部の観察、訪室のタイミングが難しいと、具体的な実習場面の中でその難しさを考える一

方で、男性看護師として病棟で勤務できるわけではないが、男子学生もいずれ父親になるという将来像と照らし合わせて実習の意義を考えていることがうかがえた。男子学生の母性看護学実習は難しいという実習前のイメージは、男子学生に対する対象者の受け入れや良好な関係性から、男子学生が母性看護学実習に行くことは良い経験であると好転傾向にあると考えられる。

実習後は「男子学生」、「母親」、「外陰部観察」、「難しい」、「学ぶ+できる」、「良い」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「男子学生-見る」、「看護-学ぶ+できる」という特徴表現、「男子学生-見る」という注目語情報、「イメージ-良い」、「経験-良い」、「母親-強い」という好評語や「イメージ-悪い」、「受け入れ-良い+ない」という不評語から、外陰部の観察は難しく、男子学生が産科病棟で実習を行うことに対するイメージや受け入れは良くはないものの、男子学生でも見学できる場面はあるため、看護を学ぶことはできると考えている。また、女子学生は、実習を通して、女性に備わる母親の強さを実感し、将来父親になる男子学生にとって母親を理解する良い経験になると考えている。

女子学生の母性看護学実習に参加する男子学生への思いは、対象者の視点から父親の視点、看護師の視点と変化しているといえる。母性看護学実習において、女子学生は男子学生に比べて、ケアの実際や看護師としてありたい姿、看護の意義・素晴らしさ等の職業観を深く洞察している¹³⁾といわれているように、女子学生は男子学生の母性看護学実習について、性差よりも看護学生としての学びを重視していると考えられる。そして、男子学生に対する思いの中で、不評語として「異性-難しい」、「受け入れ-難しい」、「男子-難しい」、「タイミング-難しい」、「イメージ-悪い」、「受け入れ-良い+ない」が抽出されており、男子学生の実習の難しさは感じているものの、男子学生とペアで実習を行うことが女子学生の実習に対してマイナス要因になっているとは考え難い。逆に、男子学生とともに実習を行うことは実習展開のひとつととらえ、女子学生とは異なる男性目線での看護や父親の視点を共有し、学びを深める結果につながっていると考えられる。

今回の調査において、「教員」という単語は実習中の疑問でしか抽出されておらず、実習中の学生にとって教員のかかわりが十分でない可能性がある。

学生は母性看護学実習に「学びの多い実習」を最も多く望んでおり、教員には「的確なアドバイス及び指導」

を望んでいる¹⁴⁾。2週間という短期間に学生の学びを深めるためには、変化する学生の思いをくみ取り、その変化に応じた教員のかかわりが学生にとっての「的確なアドバイス及び指導」となり、「学びの多い実習」につながると考えられる。具体的には、実習前は、知識や技術の確認を十分行い、学生の不安の軽減を図る。実習中は、学生が対象者とのかかわりを持ちやすいよう会話のきっかけを創ることや、学生が提供可能なケアをアドバイスすると同時に、学生が実習しやすいような実習環境の調整を図る。情報収集においては、記録用紙の見直しをするとともに、教員とともに情報収集を行い情報のもつ意味を確認していく。そして、カンファレンスやまとめの時間において、知識や技術の振り返りだけでなく、学生の思いを引出すことや、女子学生と男子学生の学びの共有を図ることも重要となる。

V. 結論

母性看護学実習について、女子学生は、実習前は良いイメージをもち、実習を楽しみにしている一方で、他領域とは異なる健康な対象者に対する難しさや不安をもっている。実習中は、実際に行うケアの少なさからコミュニケーションを図るきっかけがつかめないことが、困難感となっている。実習後は、情報収集の難しさや母親とのかかわりの難しさを感じていると考えられる。

しかし、母性看護における看護師や助産師の役割を学ぶと同時に、母親の児に対する優しさや学生に対する優しさに触れ母親の偉大さを感じ、実習前の不安は、実習後には学習意欲へと変化しているといえる。

実習前、実習中、実習後と変化する学生の思いをくみ取り、その変化に応じた教員のかかわりが学生にとっての的確なアドバイス及び指導となり、学びの多い実習につながると考えられる。

また、男子学生の母性看護学実習について、女子学生は、実習前は対象者の立場で受け入れの難しさを感じているが、実習を通して、乳房ケアや外陰部の観察といった具体的な難しさへと変化し、父親や看護師の視点に立って、具体的場面に限定した困難さと男子学生の実習の必要性を考えていた。そして、女子学生は男子学生から男性目線での看護や父親の視点での看護を学んでいると考えられ、男女ペアでの実習は結果的に女子学生の学びを深めているといえる。

研究の限界と課題

本研究では、対象者が14名と少数であることから、看

護系大学の学生全般にあてはまるものとは言い難い。今後は、さらに対象者の数を増やすと同時に、教員のかかわりと学習効果の検討も行い、学生の学びを深めるための実習指導を行っていきたい。

(謝辞)

本研究をまとめるにあたり、学生の実習を快く受け入れて下さいました実習施設の皆様、対象者の皆様に感謝いたします。そして、本研究にご協力いただきました学生に感謝いたします。

本研究は、第54回日本母性衛生学会での報告内容を加筆修正したものである。

文献

- 1) 伊藤良子：母性看護学実習前後の「実習に対するイメージ」の変化 - SD法質問紙による授業評価の試み - , 京都市立看護短期大学紀要, 35, 137-144, 2010.
- 2) 都竹友季子, 野田貴代, 出口睦雄：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第3報） - 母性看護学実習に対する男女の意識の違いと母性意識の高まる指導的関わりについて - , 愛知きわみ看護短期大学紀要, 6, 7-13, 2010.
- 3) 藤吉恵美, 小林貴子, 辻俊子, 他：基礎看護実習における学生カンファレンス記録からみたカンファレンスの評価と課題, 岐阜医療科学大学紀要, 4, 73-78, 2010.
- 4) 前田祥子, 鹿村真理子, 坂本由希子, 他：基礎看護技術習得に対する学生の認識と行動 - 自己学習記録のテキストマイニング分析 - , 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 9, 33-43, 2013.
- 5) 入江拓, 小平朋江：看護大学生の精神科保護室に対する受け止めおよび視点の変化, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 15, 1-10, 2007.
- 6) 服部兼敏：看護の言葉をテキストマイニングする, 看護研究, 46 (5), 462-474, 2013.
- 7) 服部兼敏：テキストマイニングで広がる看護の世界, 142-144, ナカニシヤ出版, 京都, 2010.
- 8) 太田操：ウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程, 11-14, 医歯薬出版, 東京, 2009.
- 9) 野田：前掲注 (4)
- 10) 佐々木睦子, 内藤直子, 藤井宏子：母性看護学実習における実践能力習得への4キーパーソンからの影響要因, 香川大学看護学雑誌11 (1), 17-27, 2007.
- 11) 野田貴代, 都竹友季子, 出口睦雄：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第6報） - 学生と教員の思い方の

- ズレー，愛知きわみ看護短期大学紀要，7，29-38，2011.
- 12) 神林玲子，菅野美香，西脇美春：母性看護学実習における学生の不安と自己受容性に関する研究，山梨医大紀要，17，80-83，2000.
- 13) 萩山優子：母性看護学実習で分娩に立ち会った看護学生の性差による認知の特徴についての分析，第41回母性看護，43-45，2010.
- 14) 都竹友季子，野田貴代，出口睦雄：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第3報）－母性看護学実習に対する男女の意識の違いと母性意識の高まる指導的関わりについて－，愛知きわみ看護短期大学紀要，6，7-13，2010.